

1. 本研究の経過

(1) 国土地理協会の助成の継続

2005 年度より 5 年間の予定で継続されている財団法人国土地理協会の外邦図研究グループへの助成をうけた（2008 年度も助成金額は 200 万円）。

(2) 科学研究費の継続

2007 年度より 3 年間の予定で採択された科学研究費（基盤研究 [A]）「アジア太平洋地域の環境モニタリングにむけた地図・空中写真・気象観測資料の集成」が、2008 年度も継続された（代表者：小林茂、2008 年度の直接経費：810 万円）。ただし、2007 年度について採択されたデータベース科研「外邦図デジタルアーカイブ」について、代表者を交代して 2008 年度も申請を行ったが、不採択であった。このため、2009 年度の採択を期して、2008 年度はその準備作業を行うこととした。

(3) 研究成果公開促進費（学術図書）の採択

これまでの外邦図研究の成果を単行本に集成して刊行するため、2007 年秋に研究成果公開促進費（学術図書）を申請したところ、採択されることになった。書物のタイトルは『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ—』で、2009 年 1 月に刊行する予定で編集を開始した（交付予定金額：190 万円）。

(4) 外邦図に関する公開講演

東北地理学会と歴史地理学会の合同大会の初日に開かれた公開講演会（2008 年 5 月 16 日、東北学院大学押川ホール）で下記の講演を行った。参加者は 70 名であった。

田村俊和・関根良平「外邦図の成り立ちとゆくえ、そして生かし方」（写真 1）（本誌 76-79 頁参照）

(5) 国土交通省国土地理院所蔵の外邦図一覧図の見学会

つぎに述べる日本国際地図学会定期大会における



写真 1 田村俊和氏・関根良平氏による発表

シンポジウムの前日（2008 年 8 月 8 日）に、国土地理院において同院所蔵の外邦図一覧図を見学した（写真 2）。これに際しては、地理空間情報部、基盤地図情報課、地理史料係長の南昌代氏ほかの皆さんのお世話になった。この外邦図一覧図は、すでに長岡正利氏の論文（「陸地測量部外邦測量の記録—陸地測量部・参謀本部 外邦図一覧図—」地図 31(4): 12-25, 1993 年）に紹介されているもので、外邦図を考えるに際し不可欠の資料である。一枚物から冊子体のもので多様であり、さらに詳細な目録の作製やデジタル化が望ましいことが理解された。



写真 2 外邦図一覧図見学会の様子

(6) 日本国際地図学会定期大会でシンポジウムを開催

日本国際地図学会大会（つくば市、国土地理院、2008 年 8 月 7 日～9 日）で、外邦図に関するシンポジウム

(8月9日)が開催できないかという打診を受け、本研究をめぐる最新の成果を発表し、コメントをいただくことにむけて、これをオーガナイズした。なおスピーカーとして海外の研究者を招待するほか、コメントを情報学、軍事史学の専門家をお願いした。会場は地図と測量の科学館ホールで、盛況であった。なお、村上勝彦東京経済大学教授、南榮佑高麗大学教授にもコメントを依頼したが、スケジュールがあわず実現しなかった。

①小林 茂 (大阪大) : 「外邦図の集成と多面的活用—アジア太平洋地域の地理情報の応用をめざして」

これまでの外邦図研究の成果をふりかえるとともに、それによって新たに見え始めた課題を紹介し、シンポジウムのねらいについて述べた (要旨を本誌 82-83 頁に掲載)。

②山近久美子 (防衛大)・渡辺理絵 (筑波大・日本学術振興会特別研究員) : 「アメリカ議会図書館所蔵の日本軍将校による 1880 年代の外邦測量原図」

アメリカ議会図書館蔵の 1880 年代の外邦測量原図は、現場での実測による外邦図の中でも、早期のまとまった資料で、その調査報告である。その発見の経過やこれに基づいて作製された地図、さらに測量した陸軍将校の経歴などについてふれ、さらに調査できた地図の目録も示した。広開土王碑拓本の将来者として有名な酒匂景信作製の通溝附近の図もあり、今後さらに研究の必要な資料である (要旨を本誌 84-87 頁に掲載、写真 3)。



写真 3 山近久美子氏 (右)・渡辺理絵氏による発表

③魏 徳文 (南天書局、台北) : 「日本統治期における台湾の測量と地図作製」

魏徳文氏は、台北で出版社を経営するとともに、台湾関係の近代地図を精力的に収集し、さらにそれをもとに『経緯福爾摩沙—16-19 世紀西方人繪製臺灣相關地圖一』(國立臺灣歷史博物館・南天書局、2006 年)、『測量臺灣—日治時期繪製臺灣相關地圖一』(國立臺灣歷史博物館・南天書局、2008 年)の編著者としても活躍している。この発表では、とくに『測量臺灣—日治時期繪製臺灣相關地圖一』の成果をもとに、植民地期の台湾の多彩な地図とその作製を展望した (要旨を本誌 88-90 頁に掲載、写真 4)。



写真 4 魏徳文氏による発表

④村山良之 (山形大)・宮澤 仁 (お茶の水女子大)・関根良平 (東北大) : 「外邦図デジタルアーカイブの作成と公開にともなう課題」

東北大学およびお茶の水女子大学で、外邦図デジタルアーカイブ作製にむけて活動してきた成果を報告するとともに、それが直面する課題について検討した (要旨を本誌 91-94 頁に掲載、写真 5)。この発表の成果は、宮澤 仁・照内弘通・山本健太・関根良平・小林 茂・村山良之「外邦図デジタルアーカイブの構築と公開・運用上の諸問題」(地図 46(3): 1-12, 2008 年)にも示されている。

⑤鳴海邦匡 (甲南大)・岡本有希子 (大阪大・院)・長澤良太 (鳥取大)・小林 茂 (大阪大) : 「グーグルアースと外邦図」

日本でも、古地形図をグーグルアースに貼り付け



写真5 村山良之氏（左）・宮澤仁氏による発表

て表示し、インターネットで公開するウェブサイトが動き始めており、その簡便性および景観変化の表示に有用であることを紹介して、同様の操作が外邦図についても可能なことを例示した。グーグルアースの示す画像を現在としつつ、これを地図に示された古い景観と比較対照するのが容易で、教育現場で外邦図の意義を示すにも適していると考えられる（要旨を本誌95-96頁に掲載、写真6）。



写真6 鳴海邦匡氏による発表

⑥田村俊和（立正大）：「外邦図の非軍事的活用と公開をめぐる」

外邦図の来歴にふれたあと、その利用状況について、東北大学所蔵図を例に紹介し、さらに公開をめぐる課題についてふれた（要旨を本誌97-100頁に掲載、写真7）。この発表の成果は、田村俊和「地域環境変遷研究への外邦図の利用」（小林 茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』454-464、大阪大学出版会、



写真7 田村俊和氏による発表

2009年）にも示されている。

コメント(1)：江田憲治（京都大、人間・環境学研究所／中国近代史）

歴史学が植民地統治などを検討する『「帝国」日本の学知』（岩波講座、2006年）では兵要地誌を研究対象のひとつとして、『満州地誌』（参謀本部、1894年）など地誌類にふれるが、地図については関心を寄せていない。山近・渡辺発表にあらわれる陸軍将校でも、福島安正や倉辻靖二郎に言及する程度である。関連して、地図作製に従事するスペシャリストの養成はどのようにして行われたか質問したい。

リプライ(1)：山近久美子

これまで軍事や植民地をテーマとする研究を避けてきた地理学が自分の専門であるが、『参謀本部歴史草案』などからみると、一時期地図作製に従事した将校たちは、それが終了すると他の任務につくことが多く、その分野のスペシャリストにはならなかったと考えられる。

コメント(2)：安岡孝一（京都大、人文科学研究所／漢字情報研究センター）

デジタルアーカイブは、基本的に公開されることを前提にしている。外邦図デジタルアーカイブでは、画像があるのに公開されていないものがある点に比べ、公開されている画像の解像度が低い。また書誌情報からの検索とインデックスマップからの検索があるが、相互の行き来が不自由なものも問題だ。書



写真8 発表者・コメントータの各氏

誌情報である地図を検索したあと、その隣の地図をみたくなるようなことはよくあるが、そこから直接インデックスマップに移行し、隣の図を検索できない。さらに画像を自分の論文に引用したいという場合、その手順も明示すべきである。なお、デジタルアーカイブということで、情報の専門家として支援できる側面もある。

リプライ(2)：村山良之

外邦図デジタルアーカイブについて一番言ってほしくない点を指摘された。外邦図デジタルアーカイブは、データベース科研(研究成果公開促進費のデータベース[研究成果データベース])をつかって開発しているので、その趣旨からしても、できればすべてのデータを公開したい。ただし中国大陸や朝鮮半島、ミャンマーに関する外邦図を公開して、何らかの問題が発生した場合、対処できる覚悟はない。とくに中国のネット社会では、外邦図を公開した場合、どのように受け取られるか、予測できない。私たちの意図がいかようにも解釈されるおそれがある。また、外邦図の検索システムについて、指摘されたような欠点は私たちも意識しているが、対処しきれていない。とりあえずこれでやっていこうというところである。さらに、公開している画像の質については、ネット上でみる場合を考慮して軽くしたためにこのようなことになった。研究用に使う場合には、360dpiにしたtiff画像を別途提供しており、決して高画質のデータへの道を閉ざしているわけではない。またこれについて、東北大学では内規も作っている。



写真9 発表者の各氏

コメント(3)：長岡正利(日本地図センター)

これまでの外邦図研究でわかってきた留意点を示したい。まず外邦図のコレクションは所蔵機関それぞれに特色がある。国立国会図書館のものは、帝国図書館などいろいろな機関が所蔵図を移管したもののほか、古書として購入したものもあり、バラエティーに富んでいる。また大学所蔵のものは、終戦時に参謀本部にあった、当時軍事用に使われていた地図で、古いものを含んでいない。他方、『国外地図目録』・『国外地図一覧図』(1958年作製)が記載するのは、保存用に集成された初刷りで、古いものも含まれている。ただし『国外地図目録』には初期の外邦図はふくまれておらず、その点から、これが記載するのは、陸地測量部が設立され、初刷りを保存する規則が作られてからのものと思われる。さらに、参謀本部や陸地測量部以外の機関のつくった図や外邦図として複製されなかった外国製図の存在も考慮する必要がある。

また外邦図を利用するには所在情報だけでなくインデックスマップが重要である。

さらに外邦図の利用にあたっては、精度の問題を意識しておく必要があり、満州10万分の1図の場合、大堀氏が指摘するように、臨時測図部のつくったものには精度の低いものがあり、これをロシア製の図で入れ替えている場合もある。

くわえて、魏氏の発表でもふれられたが、民間でつくられた図も考慮する必要がある。新聞社がつくった図や吉田初三郎の鳥瞰図、都市計画図などであ

る。また関連して大連の図書館には多量の地図が保存されているという。

関連したコメント：小林 茂

これまで外邦図の総点数を『国外地図目録』の示す数に従って、漠然と約2万3千点と考えてきたが、山近・渡辺両氏の発表でふれられた外邦測量原図から作製されたと考えられる朝鮮半島と中国大陸の20万分の1図は、これに含まれていない。これらは、もちろん東北大学・京都大学・お茶の水女子大学の外邦図目録にもみあたらない。ともあれ3大学の目録ができて、各コレクションの特色がわかってきたのは大きな成果である。

コメント(4)：清水靖夫

昭和20年代の終わり頃、世界各国の測量局に地図について問い合わせた手紙を出したところ、インドネシアから送られてきた地図に、「秘」の字のついた50万分の1図があって、おどろいたことがある。おそらく日本が接收したものを取り戻したものであろう。ただし私の外邦図への本格的関心は、ある出版社によって刊行された台湾の地形図のリプリントが、台湾全体をカバーするため、いろいろな種類の図を寄せ集めているのに気がついたときにはじまる。地図には作製の経緯があり、地図をつくった人の思いもこめられている。リプリントは一貫した方針でつくられるべきであることを痛感した。

ところで今の日本は、地図が自由に購入でき、利用できる。それが困難な地域は現在も少なくないが、文化財としての地図、過去の証言としての地図を日本から発信できないかと考える。もちろんこの場合、地図には人権問題や政治問題が絡むことにも留意する必要がある。

さらに地図の保存を考える場合、大学ではこれに熱心な方がおられるあいだはよいが、そうした方がいなくなると、どうなるのかというのは大きな心配だ。

以上のコメントの後、千葉大学リモートセンシング研究センターのヨサファット・テトオコ・スリ・スマンティヨ氏(写真10)より、外邦図のデータも



写真10 ヨサファット・テトオコ・スリ・スマンティヨ氏によるコメント

一部に使った環境研究を手がけていることのほか、インドネシアには古い地図がすくなく、外邦図の意義があることが紹介された。また、東京大学空間情報科学研究センターの有川正俊氏(写真11)より、外邦図デジタルアーカイブの趣旨や希望は理解でき、限界もあるが、同センターで協力できる可能性がある」と述べられた。



写真11 有川正俊氏によるコメント

この後、総合討論に移り、化学に詳しい魏徳文氏より、地図用紙は漂白されて酸性になっているため、劣化しやすいこと、また紙の繊維は昆虫の栄養剤のような特色があり、食害に留意すべきことが指摘された。さらに外邦図の民間への移管やビジネス化にくわえデータの提供について質問があった(質問者不明)。これに対して村山良之氏より、外邦図デジタルアーカイブは、科学研究費で作成しており、データの販売は基本的にあり得ないことを指摘し、また引用にあたっては東北大学の内規に従ってほしいと

要望した。

さらに菊池正浩氏より、外邦図の公開には隣国の歴史認識が関与してくるが、文化遺産としての地図の保存には国立の地図博物館が必要であるとの指摘があった。また星埜由尚元国土地理院長（写真 12）から、菊池氏の話に同感するとしつつ、外邦図は文化遺産として基本的に公開すべきで、日本の植民地支配を反省しつつも、それに向けて関係者の意識を変えていくことが必要との見解が示された。

最後に田村俊和氏が、外邦図の公開への道を探るにあたり、戦前・戦中の地図が、戦後に独立した国にどのように受け継がれていったのか、知っておくべきであると指摘した。インドネシアについて調べてみたところ、公式的にはオランダからの地図の移管はないが、台湾や朝鮮半島の場合、どのような経緯があったのか、調査する価値があるとして、課題を提起した。



写真 12 星埜由尚氏によるコメント

(7) 「近代東アジア土地調査事業研究」プロジェクトとの協力

大阪大学文学研究科の片山剛教授（東洋史）を中心とするグループでは、科学研究費により、近代東アジアにおける土地調査事業の研究を推進しており、台湾や中国での資料調査を重ねている。土地調査事業による地籍図や地形図作製の理解は、外邦図研究にも重要と考え、この調査に参加してきた小林は、2008年11月23～24日に開かれたその研究集会に

参加した。またこれまで外邦図研究会の集会に参加してきた郭俊麟氏（台湾・国立花蓮教育大学）および台湾での資料調査に便宜を提供して下さった廖汝銘氏（台湾・中央研究院人文社会科学研究センター）の来日ならびに講演について協力した。あわせて、両氏と台湾関係の各種地図の研究について意見を交換した。

(8) 研究成果公開促進費による『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ—』（大阪大学出版会）の刊行

研究成果公開促進費（学術図書）の採択をうけ、まずすでに集まっている原稿について、執筆者に入稿前の点検を求めた。つぎに執筆者から提出された原稿を掲載用フォーマットに変換して順次入稿し、校正をくわえて、2009年2月27日に無事刊行した。原稿の量は予想外に増え、512頁に達するやや大冊の書物となった。価格は7,980円である。

編集作業は全体に遅れぎみではあったが、大阪大学特任研究員の波江彰彦氏の手際よい作業により、何とかこれを挽回することができた。また大阪大学出版会の落合祥堯氏にもお世話になった。

なお、2007年度に古書として購入した内邦地図一覽図および高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料（『外邦図研究ニューズレター』5号、60-62、84-90頁参照）を、この編集にあたって活用した。

(9) その他の活動

①お茶の水女子大学における外邦図のスキャニングを継続した。2007年度までに東北大学所蔵の外邦図のスキャニングは終了したが、継続してデータベース科研を申請し、それに漏れている外邦図のデジタル画像の収集を予定してきた。上記のように、2008年度のデータベース科研は不採択であったが、少しでもこれを進めるために、作業を継続した。

②国土地理院が所蔵する陸地測量部時代の部内誌を調査した（渡辺理絵）。国土地理院地理情報部地図史料係の協力を得て、『研究蒐録地図』などの部内誌を調査し、あわせてその写真撮影を行った。

③2008年6月22日、立教大学で開催された Asian Study Conference Japan の第 32 セッション、Japanese Wartime Geopolitics で、下記の発表を行った。この発表についてお世話いただいた、C. W. Spang 氏に感謝したい。

Shigeru Kobayashi in cooperation with Tetsuya Hisatake[†] and Kunitada Narumi: The Relation between the Military and Geographers in Japan during World War II.

④2008年9月22日～10月4日、ワシントン、アメリカ議会図書館で、1880年代の日本人将校による外邦測量原図の調査を行った(山近久美子・渡辺理絵・小林茂が参加)。外邦測量原図の書誌的データをとるとともに、デジカメ(Canon EOS 5D)による写真撮影を行い、一部についてはスキャンを依頼した。これに際しては、藤代真苗さんなどアメリカ議会図書館の日本人スタッフにお世話になるほか、とくに地理・地図部のスタッフと交流を深めた(写真13)。



写真13 アメリカ議会図書館での作業

⑤2008年10月23日から26日に行われた「地図展 2008 in 仙台」(国土地理院)に参加し、25・26日に東北大学片平キャンパス「さくらホール」にて、東北大学所蔵の外邦図展を開催した。

⑥2008年11月9日、アメリカ議会図書館での調査をふまえ、人文地理学会大会(筑波大学)で下記の

発表を行った(要旨を本誌101-102頁に掲載)。

小林 茂・山近久美子・渡辺理絵「初期外邦図の作製過程と特色」

⑦2009年3月3～13日、アメリカ議会図書館で1880年代の日本人将校による外邦測量原図の調査を継続した(山近久美子・渡辺理絵が参加)。朝鮮半島の外邦測量原図の目録作成にむけて、補足調査を行うほか、中国大陸の外邦測量原図の調査および写真撮影を行った。また外邦測量原図から作製された清国二十万分一図の写真撮影なども行った。

⑧不二出版刊『外邦測量沿革史 草稿』(全4冊)に解説を執筆した(小林茂)。外邦測量に関する基本文献、外邦測量の変遷の概説にくわえ、『外邦測量沿革史 草稿』の編集過程と編集を担当した岡村彦太郎に関する検討結果を示した。なおこの解説は、2008年3月刊の附属小冊子に掲載される予定である。

⑨2009年3月17日、地図情報センターで同センター所蔵の外邦図に関する資料の提供をうけた。同センターには、渡辺光氏(1904-1984)や浅井辰郎氏(1914-2006)旧蔵の外邦図があり、今後本格的な調査が必要である。

⑩2009年3月18日、学習院大学東洋文化研究所で、朝鮮総督府臨時土地調査局測地課に関連する資料の調査を行った。従来ほとんど紹介されていない、測量および地籍図・地形図作製に関する資料を閲覧するとともに、その複写を依頼した(小林茂)。

⑪2008年2月13日に、税務大学校(在和光市)租税資料室で、大正期における地籍測量関係の教本にくわえ、目賀田種太郎の演説記録などの調査を行い、一部を複写した(鳴海邦匡)。なお、この調査は前年度に行われたものであるが、外邦図研究ニューズレター5号に掲載できなかったため、ここに示しておきたい。

(10)2008 年度に刊行されたその他の外邦図関係論文

『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ—』に掲載された論文（本誌末尾の短報参照）以外に、下記の論文が刊行された。

- 1)小林 茂・鳴海邦匡 2008.「総合地理研究会と皇戦会—柴田陽一『アジア・太平洋戦争期の戦略研究における地理学者の役割』の批判的検討—」歴史地理学50(4): 30-46.
- 2)宮澤 仁・照内弘通・山本健太・関根良平・

小林 茂・村山良之 2008.「外邦図デジタルアーカイブの構築と公開・運用上の諸問題」地図46(3): 1-12.

- 3)村山良之・関根良平 2008.「東北大学所蔵の外邦図について」地図中心 433: 17-19.
- 4)小林 茂・岡田郷子 2008.「十九世紀後半における朝鮮半島の地理情報と海津三雄」待兼山論叢・日本学篇 42: 1-26.

(文責：小林 茂・波江彰彦)